
国際研究集会「歴史展示におけるジェンダーを問う How is Gender Represented in Historical Exhibitions?」を開催して

横山百合子

1. 国際研究集会「歴史展示におけるジェンダーを問う How is Gender Represented in Historical Exhibitions?」の概要

2016年度から3年間の計画で開始した国立歴史民俗博物館基盤研究「日本列島社会の歴史とジェンダー」では、第2年度にあたる2017年7月3日、「歴史展示におけるジェンダーを問う How is Gender Represented in Historical Exhibitions?」と題して、博物館展示におけるジェンダーをテーマとする国際研究集会を開催した。この研究集会は、2016年度の研究成果に基づき、国立歴史民俗博物館と、日本学術会議史学委員会歴史学とジェンダーに関する分科会との共催により、共同研究の中間年の成果発信として実施したものである。本研究集会の内容は、2020年度『国立歴史民俗博物館研究報告』（以下、『研究報告』）特集号において研究成果の一部として発表する予定であったが、時事的な話題が少なくなく、また国立歴史民俗博物館における通常の展示業務とも密接にかかわる内容であることから、速報性を重視し、中間報告として『研究報告』通常号において発表することとした。開催にあたっては、ジェンダー史学会と総合女性史学の後援をいただいた。

当日のプログラムは、以下のとおりである。

司会：小島道裕（国立歴史民俗博物館教授）、横山百合子（国立歴史民俗博物館教授）、義江明子（帝京大学名誉教授・国立歴史民俗博物館客員教授）

10:00 - 10:10 開催趣旨 Opening Remarks 横山百合子

10:10 - 10:50 トノムラヒトミ報告（ミシガン大学歴史学部教授）

「アメリカにおけるジェンダー史研究状況と博物館展示」

Gender Studies in the United States and Exhibitions

11:00 - 11:40 黄貞燕報告（國立臺北藝術大學博物館研究所准教授）

「博物館の資料収集・展示におけるジェンダー：台湾での経験から」

性別・歴史教育と博物館：以臺灣經驗為例

Collecting Materials and Exhibitions in the Museum from the Viewpoint of Gender :
Focusing on the Experiences in Taiwan

12:50 - 13:50 リー・コー・リン報告（シンガポール国立博物館前館長）

「包摂の歴史—シンガポール国立博物館におけるケース・スタディー」

History of Inclusion: a Case Study of the National Museum of Singapore

14:00 - 14:40 松本直子報告（岡山大学大学院社会文化科学研究科教授・日本学術会議連携会員）

「日本の博物館におけるジェンダー表現の課題と展望—歴博の考古学展示に触れつつ—」

Current Problems and Future Issues of Gender Representation in Japanese Museums: With Reference to Archaeological Displays at the National Museum of Japanese History

15:00 - 15:10 コメント1 Brief Remarks 1

長志珠絵（神戸大学大学院国際文化学研究科教授・日本学術会議連携会員）

15:10 - 15:20 コメント2 Brief Remarks 2

三上喜孝（国立歴史民俗博物館教授）

15:20 - 16:50 総合討論 Discussion

トノムラヒトミ，黄貞燕，リー・コー・リン，松本直子，長志珠絵，藤尾慎一郎（国立歴史民俗博物館教授・日本学術会議連携会員）

16:50 - 17:00 総括 Concluding Remarks

久留島典子（東京大学史料編纂所教授・日本学術会議連携会員）

★当日の都合により，三上喜孝のコメント2は，行わなかった。

この国際集会では，ジェンダーの視点から，歴博を含む日本国内の博物館と，アメリカ，台湾，シンガポールの博物館における多様な経験が報告され，歴史叙述の一つである博物館展示におけるジェンダーの重要性が浮き彫りになった。この成果は，今後の博物館におけるジェンダー視点導入に際しての基盤形成にも貢献するものである。

以下，国際研究集会開催の経緯と目的を記し，次に，研究集会の意義を的確に示すコメント（長志珠絵）と総括討論（久留島典子）を掲載する。続いて，報告論文（トノムラヒトミ，黄貞燕），研究ノート（松本直子），調査研究活動報告（リー・コー・リン），さらに，国際研究集会以降，山形大学（「芸術文化実習」2018年10月25日～26日実施，担当教員：石澤靖典，佐藤琴），千葉大学（「比較ジェンダー史実習B」2019年2月13日～18日実施，担当教員：池田忍，三上喜孝，横山百合子）による博物館とジェンダーをテーマとする授業実践について，その成果と課題を調査研究報告「博物館展示をジェンダーの視点から見つめ直す試み—大学における「課題解決型学習」（三上喜孝）として紹介する。

2. 国際研究集会開催の経緯

基盤研究「日本列島社会の歴史とジェンダー」では，A 文字／文体とジェンダー，B 衣料生産・流通におけるジェンダー，C セクシャリティ発現の場，D 社会集団とジェンダーの四つの柱に沿って，共同研究を進めてきた。また，その成果発信の一つとして，2020年10月6日～12月6日企画展示「性差（ジェンダー）の日本史—治める・働く・性を売る（仮題）」を企画し，日本列島社会の歴史におけるジェンダーの構築と変容について広く問題提起を行う予定である。しかし，歴博

においては、これまでジェンダー視点にたつ研究および展示経験は乏しく、またジェンダーという抽象的な概念にもとづく歴史研究の成果をモノを通して示すこと、すなわちジェンダーを可視化することは必ずしも容易ではないことが予想された。一方、歴博以外の国内の博物館においても、ジェンダーを意識した展示例は少ない。むしろ、後掲の松本直子論文にみるように、歴博をはじめ国内の博物館、美術館での展示は、ジェンダーの視点からみてさまざまな問題を抱えているにもかかわらず、その点が十分に自覚されてこなかったのが実情である。すなわち、基盤研究の成果を展示の形式で発信するためには、上記 A～D のような個別の研究だけでなく、展示とジェンダーの関係についての検討が不可欠であることが明らかになってきたのである。また、その際、日本国内の実践例にとどまらず、諸外国・諸地域のジェンダー史研究や展示経験に学び、交流することが効果的であることも予想できた。

以上の経緯から第二年度に開催したのが、国際研究集会「歴史展示におけるジェンダーを問う How is Gender Represented in Historical Exhibitions?」である。

3. 国際研究集会の目的

本研究集会では、基盤研究代表者横山百合子が、冒頭、以下の開催趣旨を述べた。

開催趣旨

ジェンダー視点からみた歴博における研究・展示の現状

国立歴史民俗博物館（以下、歴博）では、日本列島社会の歴史を、ジェンダーの視点から読み替え更新することを目指して、2016 年度より基盤共同研究「日本列島社会の歴史とジェンダー」を立ち上げ、ジェンダー視点にたった日本列島社会の歴史の実態の実証的解明を開始した。また、この共同研究では、その成果発信の一つとして、数年後に、日本列島社会の歴史とジェンダーをテーマとする展示開催を計画している。そのため、本共同研究の研究拠点である歴博での展示をジェンダー視点から見直し、どのような成果と課題があるのかを検証する作業も行ってきた。

歴博が設置された 1981 年当時は、歴史のなかで見落とされてきた女性たちの姿を明らかにする女性史研究が、ようやくアカデミズムの一面に位置づけられた時期であった。また、性差の社会的意味を問うジェンダー概念が日本史研究に影響を及ぼすに至ったのは、それからさらに 10 年以上を経過した 1990 年代以降のことである。現在の歴博には、開設以来変更されていない展示も少なくなく、女性史研究やジェンダーの視点が反映されていないのはやむをえないともいえよう。しかし、その後、リニューアルを経て一新されてきた展示においても、ジェンダー視点は十分に組み込まれていないのが現状である。

ジェンダー視点の不十分さを生む三つの要因

このような現状の背景には、いくつかの問題が考えられる。第一に、ジェンダー視点に立つ歴史学は比較的新しい研究分野であり、旧来の歴史像を書き換える斬新な研究が蓄積されてきているものの、すべての時代の社会像を十分に描く段階には至っていない。日本においては、人文学や社会科学の重要課題として性差を正面から取り上げる動きは、ジェンダー法学会（2003 年発足）、ジェ

ンダー史学会（2004年同）、フェミニスト経済学会（2008年同）など、学会設立という点からみても最近のことであり、ジェンダー視点にたつ歴史研究もさらなる発展が求められる段階にあるといえよう。本集会の基礎となる基盤共同研究においても、基礎的研究の充実を大きな目標としてきた。

しかし、第二に、国際的には、「ジェンダー主流化」が重要課題として掲げられ、社会におけるジェンダー平等が進み、ジェンダー視点に基づく歴史研究や博物館展示にも大きな変化が生じているのにたいして、日本ではなぜそのような動きが鈍いのかという深刻な問題にも眼を向けなくてはならない。

一般に、研究におけるジェンダー視点の導入は、それに取り組む研究者自身の立場を問うという「政治性」を伴う。一方、研究者であるとなにかかわらず、多くの場合、ジェンダー意識は、私的な経験や性別分業をはじめとする諸規範によって内面化されており、その見直しは、研究や展示を行う研究者自身の価値意識を鋭く問い直すものとなり、種々の葛藤を伴う場合も少なくない。

また、それだけでなく、現代の日本社会が性差による差別を前提として組み立てられているという現実が、そこで働く研究者、職員の意識を規定するという側面も正視しなくてはならないであろう。厳しい予算削減状況のなかで、歴博も、非正規雇用による運営を余儀なくされているが、それらの非正規雇用の大半は女性であり、それは、男女賃金格差が72.2%（2016年度厚労省発表）と大きく、意志決定の場に参加する女性の割合も極めて低いという現代日本の現状を反映するものである。このような日本社会の現実が無自覚であるとすれば、その結果として、研究や展示業務を行う主体の意識に歪みや制約が生じることもあろう。ジェンダーの視点から歴史を問うとは、研究、展示の内容を問うにとどまらず、研究・展示が行われる場、それをとりまく社会のあり方自体を問い直す作業でもあるのである。

第三に、歴史展示におけるジェンダー視点の導入の難しさの背景には、展示する側と展示を見る来館者との関係性の問題がある。ジェンダー視点にたった展示は、来館者にとって新鮮な発見の場になる可能性もあれば、強い違和感や葛藤をもたらす場合もあると考えられる。また、来館者にとってわかりやすい展示、受け入れやすい展示が、現在のジェンダー意識を強化し、上塗りしていく危険もあろう。ジェンダー視点にたった研究と展示によるその成果発信が来館者にとって魅力あるものとなるためには、来館者と展示する側の双方向的な対話の回路を保ちつつ、研究の成果とその魅力を伝える歴史叙述としての展示の方法を追求しなくてはならない。

国内外の研究・実践に学ぶ

本研究集会は、以上の三つの問題について、国内外から4本の報告を準備し、それらをふまえて討論するという構成をとる。第一の研究の深化と展示については、トノムラヒトミ氏が、アメリカにおけるジェンダー史の展開とその成果を紹介し、国内からは、松本直子氏が、日本での考古学研究をふまえて、歴博展示の到達点と課題を論じる。第二の、研究者の意識の問題や、博物館という研究・展示の場でのジェンダーについては、黄貞燕氏が、研究、資料収集、展示業務の全般にわたってジェンダー視点を導入してきた台湾での経験を報告する。そして、第三の、来館者との関係をふまえた歴史叙述としての展示とジェンダーという問題については、多民族国家における歴史叙述という課題とジェンダーの双方を視野に入れて、シンガポール国立博物館展示の再構築を牽引してきたリー・コー・リン氏が、その経験を紹介する。

歴博における研究の到達点をふまえて

本研究集会は、国内外の研究と経験から学ぶだけでなく、歴博のこれまでの研究蓄積を振り返り、その到達点を発展させる場としても位置づけられている。

ジェンダーに関する歴博の研究蓄積は乏しいが、そのなかで、2006年度に行われた歴博国際研究集会「歴史展示のなかのジェンダー」は、本集会の直接的な前提をなしている。また、ジェンダーをテーマとした研究ではないが、科学研究費「生涯学習時代における博物館教育・教育員養成および歴史展示に関する総合的研究」(JSPS 12490037, 2000～2003年度、研究代表者 佐原真→小島道裕)の成果からは、歴史展示とジェンダーを考察するうえでの豊かな示唆を得ることができる。たとえば、そこで検討されてきた「戦争は、どのように表象を用い、どのような新しい表象を作り出すのか」という研究課題は、「戦争は、ジェンダーに基づく表象をどのように用い、どのような新しい表象を作り出すのか」という、本研究の課題にも通底するものである。また、侵略や民族支配といった、展示する側と観客の歴史観や価値観を問う政治的な問にたいして、「展示意図を明確化すると同時に、その根拠となるものに観客が立ち戻って考えることができるような展示」をめざすといった実践的提起も、展示とジェンダーを考える上で有用である。

以上の課題意識と研究蓄積をふまえ、「歴史展示におけるジェンダーを問う」と題した本研究集会を開催する。

4. 国際研究集会以降の活動

研究集会は、多くの方々の協力を得て、大変充実したものとなった。その内容については、以下の論文、研究ノート等をご味読いただきたいが、ここでは、集会後の館内での活動についても簡単に触れておきたい。

国際集会以降、館内でも、歴博における総合展示や企画展示について、ジェンダーの視点に立つ見直しが必要であることが、少しずつ議論されるようになった。2019年3月リニューアルオープン予定の第1展示室先史・古代の展示の骨格はすでに決定されていたが、このような環境のもとで、基盤研究からは、ジェンダーの視点に立つ検討を可能な範囲で行うべきではないかとの提起を行った。その結果、2017年12月、展示のキャプションとパネル原稿を2週間館内で閲覧に供し、アンケートの形で意見が収集されることとなった。ジェンダーについて、このような専門外や管理部を含む広い範囲の意見を聴取する例は、これまではなかったことと聞く。よりよい展示構築に向けた第1展示室リニューアル展示プロジェクト藤尾慎一郎委員長と委員諸氏の真摯な取り組みに、改めて敬意を表したい。

その後、2018年7月22日の第8回研究会（於：歴博）において、山田康弘氏（本館考古学研究系教授）が、ジェンダー視点に立った総合展示第1室先史・古代の、男性中心に縄文人の一生を描くパネルの一部見直しについて話題を提供し、パネル案の見直しが行われた。

また、基盤研究においては、当初より研究成果を大学教育に反映させる計画を立てており、前述のとおり、共同研究員三上喜孝氏を中心に、博物館とジェンダーをテーマとする「課題解決型学習」の授業を模索してきた。2018年度には、千葉大学文学部演習、山形大学人文学部演習（いずれも集中講義、於：歴博）が行われた。主体的にジェンダーを学ぶ授業として、学生、教員、博物館の

いずれにとっても有意義であることが確認され、2019 年度も、大学と連携し、継続して取り組んでいる(2019 年 9 月 18 日東京女子大学文学部における日本近世史演習, 担当教員 村和明(東京大学), 於: 歴博)。

ジェンダーは、歴博における研究・展示業務全体のなかで常に意識すべき重要な問題である。本中間報告も、今後の歴博における研究と展示に資することを目指すものであり、忌憚のないご批判・ご助言をお願いしたい。

最後になるが、国際研究集会開催にあたって、共催の労をお取りいただいた日本学術会議史学委員会歴史学とジェンダーに関する分科会、および御後援を頂いたジェンダー史学会、総合女性史学会に深く御礼申し上げたい。

(本館研究部教授)

コメント「歴史展示におけるジェンダーを問う」

長志珠絵

歴史展示とジェンダー・ブラインドという課題

歴史展示をめぐる、ジェンダーを意識的に含み込んでなされる議論はおそらく初の試みだろう。博物館をめぐる新自由主義的な動向が深刻さを増すことへの批判的議論は多いが、展示内容そのものに関わって、ジェンダーという課題に踏み込むわけではない。しかし海外では、国立の博物館が、ジェンダーに意識的な展示を自己改革として実現させてきた。そこでの共有される着地点は、歴史の実践としての歴史展示がどういう状況にあるのか、何が課題になるのか、どのように意識されているのか、この点だろう。たとえばトノムラ、黄、リーの3報告ではジェンダー射程をふまえたインターセクショナリティや多元性の重要性が、それぞれの歴史展示の実践によって強調された。ここではまず出発点として、歴史展示を可能とする知の集積のあり方そのものがいかにジェンダーバイアスにとらわれているのか、この点を問うた。トノムラヒトミ「アメリカにおけるジェンダー史研究状況と博物館展示」は、今日のキュレーターによる調査と実践によって、19世紀半ば、近代国民国家による自然史博物館がすでに収集物段階で“オス”を中心とするカルチャーにあったこと、剥製による展示物の体系や学術用語も、ジェンダーブラインドな体系を前提としてきたことなどの論証と意識化がなされ、これらへの対抗展示などの実践を紹介する刺激的な問題提起から始まった。

新たな歴史展示の実践―「生活」・アイデンティティ・「国民」の物語

他方、新しい展示はどこに向かうのか。国立博物館で2000年代に実現した新たな歴史展示の実践報告を行った台湾とシンガポールでの2報告では、歴史展示に対する今日の社会の側のニーズをどのようにとらえ、応えるのか、またその社会的な需要に対する国家の側の支援がどうあるべきか、この点が極めて自覚的・意識的であることが痛烈に印象に残った。

例えば黄貞燕「博物館の資料収集・展示におけるジェンダー―台湾での経験から」報告では、パブリックヒストリーを形作る重要な要素としてジェンダーが課題とされるとともに、何を収集するのか、この点でも意識的に、歴史の主体としての「大衆の歴史」や「生活」、一般の人々による「歴史を語る」こと、さらには取材のあり方そのものが収集の対象とされ、そのための展示空間にも工夫を凝らした、とする。収集と展示が一貫した目的によってなされていることがわかるが、その背後には、ジェンダー課題が台湾先住民も含めての多元的な民族や文化との関係でとらえられるとともに、1990年代以降、「新台湾の子」という社会のニーズとして歴史アイデンティティ構築の要請が課題となっていった近い過去の歴史がある。単線的な歴史の語りではなく、いかに「ひとびと」の多様性を広げていくのか、追体験も含め、新しい国民史の語りの姿としての歴史展示に見出すとすれば、同様の論点は、リー・コー・リン「包摂の歴史―シンガポール国立博物館におけるケース・スタディ 2006－2015」報告に一層明確だ。ここでも「暮らし」に焦点をあてることで、「公式の物語」に対する「もう一つの物語」が配されるとともに、アーカイヴ資料としての声、動画が意識的に多

用される。特に観る側の感情を喚起する歴史展示のあり方、日本占領時代を「自転車展示」によって象徴させる戦略的な表現、特に労働者階級の移民女性を、出身の差異による装いの違いで明示し、アイデンティティとしての歴史をたぐりよせるための展示を試みるなど、空間構成も含め、現代史展示をめぐる多様な研究成果が駆使されている。あるいは従来の、19世紀初頭を軸とした植民地史の一部ではない新たなシンガポール史が、神話の時代も含め、12世紀から展開されるという。

このように、2つの国立博物館による新たな歴史展示の試みは、ジェンダーに配慮し、特に人々の「生活」に軸足をおきつつ、他方で、意識的な「国民の物語」の創出でもある。新たな包摂の軸に「歴史を語るうえでのジェンダーの意義は、女性に関心を払うだけでなく、立場、価値観と方法に制約された過去の歴史記録を見直し、再解釈の可能性を探ることにある」（黄）とするジェンダー射程の広がりにはまずは可能性をみたい。

その際、後の2報告が共有する、見る側が自分のものとして感じられる歴史・歴史展示という課題をどう考えるべきだろうか。この論点は歴史実践としての歴史展示がどのような位置にあるのか、という問題と関わるものだろう。

問いの空白を問う—歴史展示をめぐる「わかりやすさ」という陥穽

この点でたとえば日本史の学会誌は〈新自由主義時代の歴史展示〉といった特集が度々組まれるなど、博物館の歴史展示や体制そのものへのバッシングへの対抗的な議論を蓄積させてきた。特に、日本の歴史研究においては、同じく社会との関係が問われる教科書問題や歴史教科書をめぐる対抗文化の構築は相当の蓄積を持つ。さらに歴史の実践として歴史教育を考える際、ジェンダー射程をふまえることは、学習者を歴史の主体として育み、エンパワーメントするために必要な試みとして議論が積み重ねられている。教科書叙述にも変化の兆しはあり、1925年の普通選挙の表記は（本土と入れるべきだが）「男子普通選挙」へ、「学び舎」の中学校教科書のような、ジェンダー射程に意識的な教科書も登場した。学界の発信はどうか、という点でも、「慰安婦」問題に象徴されるように、ジェンダー射程と歴史研究の関係は、横山報告が指摘されたような、研究者個々人の政治性にふれる、というナーバスな側面の一方、特に歴史修正主義者との対決を迫られる主題については、史料読解はもちろん、根拠を示して歴史を語る・考える—という、当たり前の作法に関わる、いわば歴史研究者としての職業倫理がまざる、という側面も持つ場合がある、と考える。

とすればジェンダーは、なぜ「日本史」の歴史展示の課題になってこなかったのか？ 実は私は今回、コメンテーターとしてというよりは、歴史研究を専門とし、他方で歴史教科書や一般教養としての歴史教育に関心を持ってきた文献研究者として、ここでの問いの空白に改めて気づき驚いた。端的に言えばそれは、なぜ「日本史」の歴史展示の課題としてジェンダーは論じられてこなかったのか？という問題である。歴史展示にとってジェンダー視点がいかに必要かつ有効か、という論点についての議論の不在、少なくとも議論として蓄積されてこなかった点は、このことそのものが興味深い論点であり、歴史教科書をめぐる議論や実践、およびそれらの蓄積と比較して論じる必要があると思う。強調しておくべきは、教科書も歴史展示もわかりやすさを求めるとともに、啓蒙的視線によって、無自覚なまま古いジェンダー意識が入り込み、再生産する、あるいは意識的に強化することもできる強力な歴史メディアであり、歴史研究に関わる側はこの点を十分に意識すべき段階

にある、という点だろう。

では歴史展示にジェンダー視点が欠けることで何が問題なのか。この解の一つを最後に松本報告の議論にみておきたい。

松本直子報告「日本の博物館におけるジェンダー表現の課題と展望―歴博の考古学展示にふれつつ」は、歴博も含め、広く国内外の考古学展示のなかでの具体例に沿って、特に復元展示や復元画像の持つ問題性が極めて説得的に提起された。食事の支度をめぐる研究成果と乖離する描写、あぐらと正座との対比など、身体文化を伴う復元展示が固定的なジェンダーメッセージをいかにはらむのか、その危険性について、様々な角度から警鐘を鳴らす刺激的な報告だった。また量的なバランスにも言及があった。歴博展示のなかで様々な男性像がえがかれていることとは研究成果の反映である一方、画一化された女性像の提示は、今回の各パネリストが新しい歴史展示として強調していた、歴史主体としての多様性の確保という点で大いに課題を含む。議論の中でも指摘があったように、歴史修正主義者もしばしば用いるアニメキャラクターという表象レベル、市民向けの宣伝レベルの文言や文字表象に至ってもぜひ吟味いただきたいと思う。いうまでもなく、ジェンダー表現への配慮は人権意識と不可分だ。分かりやすさ、という一見、観る側に沿った物言いはしかし、一定の手続きを経た調査や方法論を踏まえたものでない以上、ジェンダー認識をめぐる現実社会の人権意識からかなり隔たった悪しきジェンダーを強化することにつながり、ひいては、研究成果を背後の文脈を換骨脱退して消費され、変容させられる危険性を持つ。コメントの際には、「伝統」という語りの持つジェンダーブラインドの濫用事例として、世界遺産認定された熊野古道の大峰山女人禁制をあげてみた。性別による明確な差別が「伝統」の名のもとに、かつ世界的な権威付けによって後押しされながら、今日存在することの負の意味が問われるべき重要な事例であり、国立博物館の歴史展示はこうした「過去の現在」が喚起する問題群にも意欲的であってほしい。

歴史を表現する営み全体のなかでの、専門知としての歴史学における、歴史展示という歴史実践がどうあるのか、その際、ジェンダー射程と歴史展示という課題は最も重要なテーマの一つであり、国立の歴史民俗博物館とはそうした課題を内外に示す位置にある、この点を改めて認識したシンポジウムであった。

(神戸大学大学院国際文化学研究科教授)

総括討論「歴史展示におけるジェンダーを問う」

久留島典子

今回の国際研究集会では、大変興味深い報告四本とコメントを得て、活発な討論が行われた。参加した者それぞれが「歴史展示におけるジェンダーを問う」という研究集会のテーマについて、種々思索をめぐらしたことと思うが、私自身も大きな刺激を与えられたので、本研究集会で明らかになった成果と課題について、以下簡潔にまとめておきたい。

長志珠絵氏のコメントでも指摘されたように、主体的に歴史の「知」を収取し、用い、表現する営み—歴史実践としての歴史展示については、日本では、同じような要素を持つ歴史教科書執筆などと比較しても、広く人々を巻き込んだ本格的な議論は、いまだ十分ではないといえる。今回、ジェンダーという観点から歴史展示について、こうした研究集会が企画されたこと自体が大変意義深く、さらなる課題を認識させる場にもなったといえる。

冒頭の開催趣旨説明のなかで、横山百合子氏は、国立歴史民俗博物館（以下歴博と略す）の展示のなかに、ジェンダー視点が十分に組み込まれていない背景として、以下三点の問題をあげた。第一に、研究蓄積の問題、第二に研究者あるいは展示をつくる側の意識の問題、そして第三に、展示における展示する側とそれを見る側との関係性の問題である。四本の報告ともに、この三つの問題・要素を組み込んだものとなっていた。

報告順序とは逆になるが、まず松本直子氏の報告は、考古遺物をわかりやすく、親しみやすく展示するためによく用いられる復元イメージに、近代以降の性別役割分担意識が投影されるという問題を扱っていた。こうした考古学的表象におけるジェンダーバイアスの問題は、特に日本では、今なおほとんど意識化されず深刻な状況にあることが、報告によって明らかにされた。当然、そこでは展示する側の解釈という研究の要素、展示を作る側の意識という要素、そしてそうしたイメージを繰り返し見せられた観客側にどのような影響があるのかという、先の三つの要素が論じられていた。これはトノムラヒトミ氏が紹介した、イギリスの自然史博物館の例にも通じる問題である。

松本報告に関連して、私は以前の歴博展示を想起した。藤尾慎一郎氏のコメントにあったように、以前の歴博は、復元展示はできるだけしないという方針を持っていた。また、たとえ復元展示を行う場合でも、たとえば中世京都の街並みを示す復元模型のなかに、人の影が全くみえないというように、極めて抑制的・消極的復元展示であった。想像で人間を置くようなことはしないという判断に基づくと思ったように思うが、はたしてこれが本当に「実証的」といえるのかどうか、訝しく思った経験が思い出されたのである。

松本報告での「ヒトの社会・文化の多様性、ひとつの文化における個人の多様性を見据えた復元を」という指摘は、不明な点は何も展示しない、復元イメージを作らないことが実証的であるという主張とは対極にあるように思える。松本報告の指摘とは、学術的に不明な点を明確にし、実証性を担保することは、過去への近現代的意識の無自覚な投影を回避する前提であり、そのうえで、慎重に復元に挑むことこそが研究の深化をもたらし、かつ社会的にもより良い変化を生むのだという主張だからである。

こうした日本の状況と比較したとき、台湾での博物館の資料収集・展示におけるジェンダー視点に関する黄貞燕氏の報告は大変示唆的であった。国の明確な方針のもと、ジェンダー視点をより積極的に位置付けた博物館展示は、当初より観客への働きかけ、社会教育といった広い意味での教育を意識したものと理解できる。この点もちろん重要だが、報告で特に黄氏が強調し、かつ印象深かった点は、博物館における資料収集という、研究にも直結した展示を作る側の営みである。なかでも近現代資料について、偶然に残された資料を扱うだけでなく、ある視点で資料収集を行うことの有効性、さらに映像記録作成のように、そのままでは記録として残らないものを資料化することの重要性を具体的に提示した点は、とりわけ強く心に残った。そして予稿集の言葉を借りれば、「つまるところ、歴史を語るうえでのジェンダーの意義は、女性に関心を払うだけでなく、立場、価値観と方法に制約された過去の歴史記録を見直し、再解釈の可能性を探ることにこそある」と指摘している点は、今一度かみしめてみる必要があろう。

この点を、より明確に意識的に推し進めたのが、リー・コー・リン氏が第三報告でケーススタディとして紹介したシンガポール国立博物館における歴史ギャラリー展示である。報告では、ジェンダーという言葉は直接的にはほとんどでてこなかった。そこで論じられていたのは、歴史における多様性の探求、多様な視点から描き出された複線的な歴史像の展示である。予稿集のリン氏の言葉を借りれば、「女性・子供、征服者と被征服者、当局者と反体制派、主人と使用人といったさまざまな社会のおよび経済的バックグラウンドを持つ人々の目を通して」描かれた歴史像といえる。リー氏が、こうした複眼的・複線的歴史像は、伝統的・教科書的な歴史像を好む観客から批判を受けることもあったが、シンガポールの人々が歴史を語るためのより多くのチャンネルを作り出した良い仕事であったと、誇りをもって自己評価していた点も印象に残った。

さらに報告で興味深かったのは、こうした歴史展示創造のために、基礎的研究はもちろん、展示制作プロセスにおいても、多くの人々が関わったことを強調していた点である。このことは、多様な視点を可視化した複線的歴史像の展示は、多様な人々の参加を得て初めて可能になったということの意味しているのではないか。この点、日本では多くの展示が一人あるいは少数の学芸員によって作られていること、歴博はそこでは珍しく、展示プロジェクトによる展示づくりという形をしていることに思いが及ぶ。しかし同時に、展示プロジェクトは本当に展示における多様性の追求において効果を発揮しているのか、という疑問も浮かんでくる。

さて、こうしたジェンダーと展示・表象の問題を、ジェンダー史研究者の観点から考察したのが、最初のトノムラヒトミ氏の報告である。ジェンダー視点での歴史分析とは、各時代や状況における特定の価値観や規範が、どのように「女」と「男」の生を再構成しているのかを考える方法であって、ジェンダーを単に女に置き換えただけのジェンダー概念を欠いた女性の歴史は、ジェンダー的な性格を考慮しない男性にのみ焦点を当てる歴史と同じだという指摘は印象深いものであった。ジェンダー概念自体は社会の二項対立構造を暴きだし、そうした構造の偏りを発見させる力を持つこと、だから、女性だけがジェンダーを「表象する」存在ではなく、男性もまたジェンダー化されていることを指摘する。そして、利用可能な展示物は作られた時点で、あるいは収集された時点で、既に本質的にジェンダー化され、さらにはそれを展示する側も展示を見る側も、当然ジェンダー化されたなかに拘束されていること、展示における根本的難しさをもたらしているこうした諸点が、自然

史博物館の例も用いて興味深く説明された。しかし、そうした困難にもかかわらず、展示物のジェンダー的意味を適切に伝えるのは、やはり学芸員の役割とするなど、研究のみならず展示にも踏み込んだ考察を行っている。

トノムラ氏は、近年アメリカにおいて歴史分析によく用いられる Intersectionality という言葉は、「ジェンダー、階級、人種」の複合と重層として社会現象を分析、記述することを意味し、最後に「多様性、平等、包摂」という理念こそ、学術と大学両コミュニティにおいて、達成すべき課題であると力説している。英語で言えば“diversity, equity and inclusion,” というこの言葉には、ジェンダーを超えて、四つの報告に通底する理念が端的に示されているといえるのではないだろうか。

さて、こうした四つの報告を承けて、歴博のような日本の博物館における歴史展示はどのような方向に進むべきなのだろうか。

その展示の目的が、伝統的歴史像、型にはまった歴史像の押し付けでないのなら、そして当然そうではないと確信しているが、展示に多様な視点、ジェンダー、年齢、階級・階層、あるいはエスニシティなど、社会的・経済的様々な要素からなる多様性を組み込むことを意識的に行っていく必要があるだろう。また、多様な視点を担保する資料収集と研究活動を、これも意識的に行っていくべきであろう。さらにこれを博物館に所属する者たちだけではなく、多様な人々をも巻き込んで行うことが重要といえる。そのうえで、「多様性、平等、包摂」という理念を人々に発信するような歴史像を示しているのか、観客が自分も歴史に参加している意識・感覚を持つことができるようになったのか、たえず検証していく必要があるのではないか。一方、伝統を旗印とした商業主義や市場化の傾向に対しても、それと意識し、対応していかなければならないであろう。

つまり、歴史展示におけるジェンダーを問うとは、ジェンダーイコール女性に関する企画展示を行えばよいということではけっしてない。もちろん今までそうした企画のなかった歴博が、女性に関する展示を行うこと自体は十分にインパクトを持つが、その問い自体が、歴史博物館としての役割、存在意義を問い、同時に歴史研究の深化を図る契機にもつながるようなものである。

これまでも歴博は、多様な視点からの展示を実践しようとしており、それは本研究集会における小島道裕氏のコメントからもわかる。歴博は、多様な階層や海外からの視点で語られる歴史像の展示ということでは、既に先進的な取り組みを行っている。だから、今までとまったく異なることを行う必要があるということではなく、より多様な視点を入れるよう、意識的な努力を続けていけばよいということなのだ。

ただし、常に意識し、検証することを自らに課し、それを持続していくことはけっして容易ではない。さらにこうした視点や姿勢を、同じ歴博のなかでも、今回の研究集会では残念ながら関連報告のなかった民俗分野の展示も含め、多様な分野の展示において生かしていくこと、あるいは日本の他の博物館展示にも影響を及ぼしていくことは、極めて難しい挑戦ともいえよう。

本日の研究集会を通じ、「How is Gender Represented in Historical Exhibitions?」という問いを常に問い続けていくことが、ジェンダーを超えた歴史展示を目指すためにも必須であると強く感じたことを最後に記し、総括としたい。

(東京大学史料編纂所教授)